SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

The Acquisition of English Verb Transitivity and Intransitivity and the Effects of Explicit Grammar Instruction by Japanese Learners of English :Focusing on English Ergative Verb Structures

メタデータ	言語: English 出版者: Shizuoka University 公開日: 2019-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otaki, Ayano メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026693

（課程博士・様式 10）

審　査　概　評　　（1,000 字程度）

大瀧綾乃氏の博士学位論文、The Acquisition of English Verb Transitivity and Intransitivity and the Effects of Explicit Grammar Instruction by Japanese Learners of English: Focusing on English Ergative Verb Structures は、日本語を母語とする英語学習者（JLEs）を調査対象者として、彼らの英語能格動詞（ergative verbs）の習得とその明示的指導効果について論じたものである。研究目的は大きく３つに分かれる。１つ目は大学生 JLEs の英語能格動詞の習得を実証的に調査すること、2 つ目は JLEs にとって能格動詞の用法で困難な用法があれば、それはなぜかを論考すること、そして３つ目は大学生 JLEs に英語能格動詞について明示的指導を行なえば効果があるかどうか縦断的に調査することである。この目的を遂行するために２つの実験を行なった（Study 1 と Study 2）。

Study 1 では、JLEs が英語の非対格動詞（unaccusative verbs）文を産出すると、*A ball was appeared from the box. といった過剰受動化現象が起こることがこれまでの先行研究から明らかになっていることを受け、自動詞構造と他動詞構造の両方を許容する能格動詞文においても、非対格動詞文の時と同様の過剰受動化が起こるのかどうかを調査した。英語同様、日本語にも同じように能格動詞が存在する（例：自：あく／他：あける、自：しまる／他：しめる）。また、第二言語習得の初期には母語からの転移がしばしば生じることも明らかになっている。したがって、JLEs が日本語の特性を利用するのであれば、英語の能格動詞文の習得は困難ではないはずで、The door was opened silently. のみならず、The door opened silently. もどちらも文法的に適格であると容易に判断できるはずであるという仮説を立てた。大学生 JLEs を対象とした実験結果は、この仮説に反するものであった。すなわち、The door was opened silently. は文法的に適格であると正しく判断する被験者が多くいたのに対し、The door opened silently. は不適格であり、この文は能動態に変更すべきであると回答する被験者が少なからず存在したのである。また、この受動態嗜好傾向は、文の主語が無生物であるときによく生じることも明らかになった。つまり、同じ能格動詞を使用しているにも関わらず、主語が有生物である時と無生物である時では受動態嗜好が大きく異なっていたのである。以上の事実から、母語からの転移よりも強い制約が働いているのではないかという仮説を新たに立てるに至った。それは、Jackendoff (2002)などが提唱する Agent First principle である。Study 2 では、英語の能格動詞について、明示的に教える実験を試みた。調査結果は、直後事後テストのみならず、遅延事後テストにおいても事前テストよりも成績が高いままを維持しており指導は効果的であることが判明した。

以上により、本論文の質は高く、十分に博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると認める。

（課程博士・様式 11）

最終試験の結果の要旨及び審査委員　報告書

学籍番号	215D001 30540001	氏　名	大瀧綾乃
論文題目	The Acquisition of English Verb Transitivity and Intransitivity and the Effects of Explicit Grammar Instruction by Japanese Learners of English :Focusing on English Ergative Verb Structures		
論文審査結果	合		
最終試験結果	合		
最終試験審査委員	審査委員長 野地恒有 委　員 石川恭 委　員 新保淳 委　員 紅林秀治 委　員 白畑知彦 委　員		

（最終試験の結果の要旨、1,000 字程度）

大瀧綾乃氏への博士論文最終試験（口頭試問）は、審査委員長を野地恒有が務め、審査委員として、新保淳教授、石川恭教授、紅林秀治教授、白畑知彦教授がその任につき、2019 年 1 月 27 日（日）13 時より 14 時 20 分までの 80 分間、愛知教育大学教育未来館にて行われた。

最初の 30 分間、大瀧氏より博士論文について、その概要を、パワーポイントでの資料を使用し説明された。すなわち、本博士論文の目的は 3 点あり、1 点目は中学・高等学校 6 年間の英語教育をとおし、日本語を母語とする英語学習者（大学生）が、英語の能格動詞の自動詞性と他動詞性の相違をどの程度身についているのかを調査することである。2 点目は、もし能格動詞構文の習得が困難な統語構造があれば、それはなぜかを追求することである。そして、3 点目は、JLEs への能格動詞構文に関する明示的指導法が効果的であることを縦断的調査によって明らかにすることである。この 3 点の研究主題について、大瀧氏は、博士論文の目的を述べた後、先行研究、本研究仮説、実験手法、実験結果とその考察、日本の大学英語教育への示唆について論じた。

その後、およそ 50 分間にわたり、5 名の審査委員との間で質疑応答が行われた。主要な質問内容は以下のとおりである。「Study 2 において、遅延事後テストを実施しているが、わずか 13 週間後であるのはいささか短いのではないか」「先行研究の白畑の研究に頼り過ぎていて、オリジナリティが少ないのではないか」「初級学習者には明示的指導がなぜ効果がなかったのか」「JLEs の英語の能格動詞の理解力のなさは、日本語での理解力のなさと比例しているのではないか」

大瀧氏は、このような質問に対しても的確に応答した。論文の質の高さからも、大瀧氏の論文は、博士の学位に相応しい内容であると判断され、審査員の全員一致で合格と判定した。

審査委員長 野地恒有　印